



昭和35年ごろ撮影された諏訪神社の中門と能馬場

(長崎外国語大所蔵)

明治30年代の諏訪神社

写真に見る

115年前の長崎

日露戦争時代

姫野 順一

□ 25 □

長崎くんちの時期、コロナ禍で諏訪のシャギリが聞けないのは寂しい。来年期しながら、ここでは明治30年代の諏訪神社を紹介してみたい。
写真は明治35(1902)年ごろ撮影された諏訪神社の中門および回廊と能馬場である。
神社は安政4(1857)

年に、たき火から広がった大火で社屋を全焼し、明治2(1869)年に再建された。中門は破風に菊の紋章を頂き、屋根の下には正一位諏訪三所の扁額が掲げられた。30年を経た檜皮ぶきの屋根には劣化が目立つ。青銅の神馬と階段横の一對の青銅水盤は、長崎製鉄所が明治3(1870)年に新政府の存続認可に感謝し、神社再建の祝い兼ねて奉納された。台石には松尾伊助、松尾代治と刻まれていた。昭和3(1928)年に諏訪公園口に移され、戦時供出により失われた。木の火袋の「献燈 惣町中」と記された灯籠(常夜灯)は、同じく明治3年の長崎市民からの奉納であると確認できる。これは木部が新装となつて現存する。右奥の狛犬は、現在長崎公園入口の鳥居横に移設された。昭和58(1983)年の御鎮座360年の大改修で中門と回廊は撤去された。

深川寿平等が奉納した。雲龍を浮かせ、笠石に擬宝珠を載せ、六角の火袋に獅子とポタンを浮き出し、台に農耕図を配した精巧なものであった。
右奥の狛犬は、現在長崎公園入口の鳥居横に移設された。昭和58(1983)年の御鎮座360年の大改修で中門と回廊は撤去された。

石が語る境内の歴史

手前の大きな石灯籠は、今は長坂の横に移されている。台座には「明治31年池田喜太郎」が刻まれている。石の痕跡は境内の歴史を物語り、撮影の時期を教えてください。



ホームページにアクセスできるQRコード

随時掲載します

(長崎外国語大学長)